心ゆくまで味わう

法然さまの『選択集』

大正大学教授
林田 康順

95

浄土宗で〝第一の聖典〟と位置づけられる書物『選択本願念仏集』（『選択集』）を大正大学教授・林田康順先生が解説。

第16章
釈迦如来弥陀の名号を以て慇懃に舎利弗等に付属したまうの文③

すべての仏による「選択」の意義

【現代語訳】

私釈（経典に説かれている8種類の〈選択〉の続き）

次に『阿弥陀経』には、〈選択証誠〉が説き示されています。第14章で明らかにしたように、『無量寿経』や『観無量寿経』といったさまざまな経典では、浄土往生のための行が実に多く説かれているにもかかわらず、あらゆる世界におられる無数の諸仏は、お念仏以外の行を修めて浄土に往生することを真実であるとは証明されませんでした。一方で、『阿弥陀経』において釈尊がお念仏による浄土往生を説かれたとき、あらゆる世界におられる無数の諸仏は、広くて長い舌をお出しになってそれぞれが教化をしている10億もの世界を余すところなく覆い尽くし、うそ偽りのない誠の言葉をお説きになって、お念仏による浄土往生が真実であると証明（証誠）されたのです。それ故、〈選択証誠〉と言うのです。

さらに「浄土三部経」ばかりでなく、『般舟三昧経』の中にも、〈選択〉が説き示されています。すなわち〈選択我名〉です。『般舟三昧経』において、「どのような行を修めれば、極楽浄土に往生することができるのか」という問いに対して、阿弥陀仏は自らお答えになり、「わが浄土に往生したいと望む者は、常に〈我が名〉をとなえて、決して怠ることのないようにせよ」と示されたのです。それ故、〈選択我名〉と言うのです。

これまで述べてきた8種の〈選択〉の中、①〈選択本願〉、②〈選択摂取〉、③〈選択我名〉、④〈選択化讃〉の4種は、阿弥陀仏による〈選択〉に、また⑤〈選択讃歎〉、⑥〈選択留教〉、⑦〈選択付属〉の3種は、釈尊による〈選択〉にあたります。そして、⑧〈選択証誠〉は、あらゆる世界におられる無数の諸仏による〈選択〉にあたります。

こうしたことから、釈尊と阿弥陀仏、そして、あらゆる世界におられるガンジス河の砂の数ほどの無数の諸仏は、心を一つにしてお念仏一行を〈選択〉しておられることが分かるのです。その他の行は、そうではありません。それゆえ、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の「浄土三部経」は、いずれも浄土往生の行としてお念仏一行を選び取るべきことを、その究極の目的としていることがわかるのです。

【林田先生の解説】

『選択集』最終章である第16章の私釈は、阿弥陀仏・釈尊・諸仏というすべての仏（三仏）が、同じく浄土往生の行としてお念仏一行だけを選び取り（選取）、あらゆる諸行を選び捨てられた（選捨）という8種の〈選択〉の提示から始まります。

前号までに、『無量寿経』に説かれる〈選択本願〉〈選択讃歎〉〈選択留教〉、『観無量寿経』に説かれる〈選択摂取〉〈選択化讃〉〈選択付属〉の、都合6種の〈選択〉が説き示されました。

今号は、『阿弥陀経』に説かれる〈選択証誠〉、『般舟三昧経』に説かれる〈選択我名〉、という2種の〈選択〉が説き示され、〈八種選択〉がそろいます。

まず〈選択証誠〉については、第14章の引文である『阿弥陀経』において、あらゆる世界におられる無数の諸仏は、お念仏による浄土往生が説き示されたことを〈証誠（真実であると証明）〉されていることから、法然上人は《念仏＝証誠＝選取》《諸行＝不証誠＝選捨》と導かれました。

次に〈選択我名〉は、これまで『選択集』の中では説かれず、この箇所ではじめて言及されたものです。『般舟三昧経』において、阿弥陀仏自らが浄土往生の行として「常に〈我が名〉をとなえよ」と述べられていることに基づいて、法然上人は《念仏＝選取》《諸行＝選捨》と導かれたのです。

このように法然上人は、「浄土三部経」と『般舟三昧経』に説かれる〈八種選択〉を提示された上で、それら〈選択〉の主体が、阿弥陀仏・釈尊・諸仏のいずれであるかを整理されます（下【表】参照）。

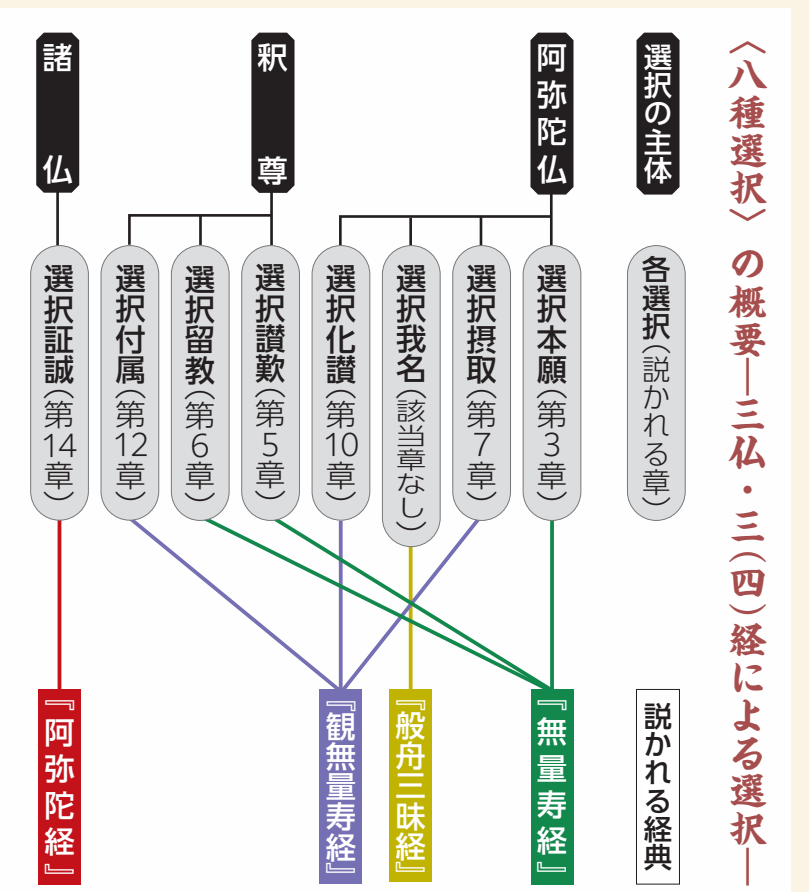
さて、法然上人が、〈選択〉という語を用いられた嚆矢は、建久5年（1194）、上人62歳の時に行われた法会での講義録『逆修説法』にさかのぼります。上人は、『大阿弥陀経』（他の訳者が翻訳した『無量寿経』）に説かれる阿弥陀仏による念仏往生願の成立について言及した箇所に注目し、「諸行を選捨し、ただお念仏一行を選定して浄土往生の行を立てられました。この〈選択〉の願とは、『大阿弥陀経』の説です」と述べられています。

『逆修説法』の時点では、〈八種選択〉の根拠となる経文をすべて取り上げているにも関わらず、〈選択〉の文字は、この〈選択本願〉以外には用いられていませんでした。

その4年後に成立した『選択集』において、法然上人は阿弥陀仏・釈尊・諸仏という三仏が、浄土往生の行として、お念仏一行だけを選取し、ほかのあらゆる行を選捨するという〈八種選択〉を確立されることとなるのです。

これによって、「浄土三部経」の総意として、広くはすべての仏の総意として、あらゆる実践行の中、お念仏の一行に普遍的・絶対的な価値を見いだされて浄土宗の教えの基盤を作ることに成功されたのです。

だからこそ上人は、「浄土往生の行として、お念仏は実にすばらしい行です。なぜなら、お念仏は阿弥陀仏が本願に誓われた行だからです。（中略）お念仏は釈尊が私たちに伝え授けられた行だからです。（中略）お念仏はあらゆる世界の仏が浄土往生を証明された行だからです」（『九条殿下の北政所へ進ずる御返事』）と述べるなど、多くのご法語において、すべての仏が選び取られたお念仏の実践を、自信をもって私たちに促されているのです。



味わい方

このコーナーでは、『選択集』の現代語訳と林田先生による【解説】を掲載しています。現代語訳部分は、篇目（章題）、引文（内容の根拠となる文章の提示）、私釈（引文に対する法然上人の解釈）で構成されています。

◉はやしだ こうじゅん
大正大学副学長。慶岸寺（神奈川県）住職。法然浄土教、浄土宗学が専門。『浄土宗の常識』（共著、朱鷺書房）、『法然と極楽浄土』（青春新書）ほか、著書・論文など多数。